

基督教独立伝道者

村田大造著作集 (14)

村田大造著作刊行会

基督教独立伝道者

村田大造著作集 (14)

村田大造著作刊行会

〔非売品〕

村 田 大 造 著 集 (14)

一九九〇年一月二五日

著 者 村 田 大 造

発行者 村 田 大 造 著 作 刊 行 会

印刷所 出 田 印 刷 有 限 会 社

連絡先 福 岡 市 東 区 舞 松 原

〒813 二 丁 目 四 番 十 七 号

佐 藤 岩 子

旧〇九二六八一—三三六三

目次

「ふくかつ」第六三号

三日の朝の嘆息	三
親を裏切った、牧者と愚弟（立証小説その三）	六
カルバリーの十字架、わがためなり（信仰詩）	二九
天皇制打破を叫ぶ者は皆ことごとく天国に迎えられるであろう	三五
社会党勝利万才（信仰詩）	四九
この一詩を社会党にささぐ	五五
編集後記	六一
「ふくかつ」第六四号	
喜びおどれよ社会党（信仰詩）	七九
ニクソン大統領閣下に訴う（信仰詩）	九〇
世の終り近づけり	九八
親を裏切った、牧者と愚弟（立証小説その四）	一〇二
お便り交歓	一一九

随感随筆・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一二一

「ふくかつ」第六五号

しっかり頼みますよ！ 社会党・・・・・・・・・・・・・一二七

お便り交歓・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・一三四

チェーホフの『谷間』の放送劇を耳にして・・・・・・・・一四六

四人の国宝的人物・・・・・・・・・・・・・・・・一六四

家永三郎兄よ！ 万才！！・・・・・・・・・・・・・一七七

二人の天使を派遣した社会党・・・・・・・・・・・・・一八七

「ふくかつ」第六六号

社会党の世界的使命を論ずる・・・・・・・・・・・・・一九五

浅沼稻次郎氏の死は何を意味するか・・・・・・・・二〇六

編集後記・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二一七

「ふくかつ」第六七号

最大なる幸福・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・二二五

アメリカ大統領ニクソン閣下に警告する・・・・・・・・二三三

我らの隣人とはたれぞ！・・・・・・・・・・・・二四五

クリスマスを迎えてこの感あり・・・・・・・・二五一

「ふくかつ」第六八号

歎呼の決意・・・・・・・・・・二五五
 我ら泣く・・・・・・・・・・二五六
 かつて私の偶像であつた姉ゆき子への義憤・・佐藤岩子・二六〇
 常に喜べ絶えず祈れ・・・・・・・・・二七六
 絶対平和主義国となれ・・・・・・・・二八〇

「ふくかつ」第六九号

人道に反逆して歩む政党と政治家の悲劇・・・・・二九三
 人道を理解するためにキリストの十字架を信ぜよ・・・・・三〇三
 四十七士は暴力主義者、成田の小学生は人道主義者・・・・・三一六
 正義の人、志賀義雄氏を論ずる・・・・・・・・・三三六

「ふくかつ」第七〇号

姉ゆき子への神の義憤・・・・・・・・・・佐藤岩子・三五一
 お便り交歓・・・・・・・・・・三五三
 預言者に従つた佐藤さん・・・・・・・・・三五四
 魔神の主張を真の神は許し給わぬぞ・・・・・三八〇
 天 滴 甘 露・・・・・・・・・三九三

先生は何派に投票したか．．．．．三九三
「ふくかつ」第七一号

「真実の証言は人のいのちを救う」．．．佐藤岩子．．．四〇七

義者を守り給う神を信ぜよ．．．．．四一七

弟、完造よりの手紙．．．．．四三二

随感随筆．．．．．四三五

村田大造先生の御召天．．．佐藤岩子．．．四三九

編集後記．．．．．四五七

村田大造牧師略歴．．．．．四五九

あとがき

主筆 村田大造

かくが

第六三号

〔一九七〇年三月二〇日発行〕

三日の朝の嘆息

朝おきて出た嘆息の言は、「実に栄作という奴は全く卑劣な奴だ。井伊大老のように男らしい行動をとって堂々と刺客のために刺し殺されるような行動をとったらどんなものかね」という言であつた。しかし彼は水も漏らさぬほど警察官の警固のもとで行動しておる。しかもこの卑劣千万な人間を首相や総理として、平氣でおれる日本国民にもアイソがつくなあ。親日家の米人が新渡戸稲造博士に、「貴国民は男らしい敗北ということを知らない。それが欠点だ」と申されたそうだが、それでも今度、男らしい敗北を成田社会党委員長がみせてくれたので、本當に胸が透く。劍をとる者は劍にて滅ぶ、という聖書の聖言の上に立つ社会党が誕生してくれたので氣分が晴れ晴れする。詩篇をよんで祈る事は村田大造にとつては生命の呼吸となるのだが、佐藤栄作のような人間が首相になつておる間は義憤の祈りの連続だ。日本国民の魂を苦しめる者をことごとく滅ぼし給えという正義の祈りが高く上がる時だけ、我らは伸び伸びする。十人の義人があるならばそれらの人の祈りによって、ソドム・ゴラムは守られると神はアブラハムに仰せ給うた。一万人のクリスチャンが、栄作首相が議會で登壇する度毎に心をつくして祈るならば、神のみ手は動くであらうけれども、アメリカさんの金で喜んで伝道している中はそうした期待はできないようだ。こんな日本が出現するということは矢内原博士が預言していたのだ。しかしその博士も天国に召されてしまった。一人の内村鑑三氏、一人の尾崎行雄氏、こういう人物は一人で不法不義の日本を征服したのだ。こうした偉大な一人が日本に出現してこないのかなあ！

内村鑑三氏は一人で勝利してしまった。「おれは相変らず単独だよ。けれどもおれは社会がノーといえばイエスと言ったのだ。社会がイエスといえばおれはノーと言った。いつも正反対であった。けれども今になって考えてみると、百のうち九十九までがおれの方が正しかった。社会の方が不義であった」とそう言って大声で笑った。「おれは自分は馬鹿だと思っているのだけれども、おれのような馬鹿者を偉い人だと言って会いにくる人があるのだからなあ」と、また大声で笑った。舟山氏は内村氏のその謙遜に感激させられたと言っておった。舟山氏は土建業であって三人ほど妾を持っていた人物であつたけれども悔い改めてクリスチャンになった。そうして妻に先き立たれ、また一人娘が死んだために戦前三十万円からの財産をことごとく社会事業に捧げて、本所の貧民窟に入つて伝道をはじめた。そこへちょうど余は訪問した。そのとき舟山氏から彼がこの偉大なる聖徒内村鑑三氏を訪問した際、内村氏の口より以上の如き直接の言をきいたということをきかされたのである。また内村氏は、「もうおれは日本には愛想がつきた。そう言つてくれ」と弟子に言い残して死んだ。そうしてその預言が成就した。天皇制は否定され、神話は否定され、日本は大地に叩きつけられた。ものの見事にやつつけられた。真の愛国者は、「これによかつたのだ。これから正直な日本が出現する」と喜んだものである。ところが遂に、嘘をつかぬという嘘を言う人だと、佐々木更三氏に責められている佐藤栄作が首相になり総理になった。そうして今度また天照大神信仰が復活した。首相の伊勢神宮参拝がはじまつた。佐藤栄作氏の祈願の対象は伊勢神宮だ。それ故に靖国神社国家護持法案を執行採決せんとしておる。そうしてアメリカ様、アメリカ様とおじぎをして、ベトナム戦争のためならば、台湾のためならば、韓国のためならば、いつでも自衛隊を出動さ

せると公言した。それでも国民が、この裏切り者がと憤慨するだけの正義感をもっていない。亡国の民といわざるをえない。預言者イザヤは次のごとく論じておる。「禍いなるかな。彼らは悪をよびて善とし、善をよびて悪とし、暗きをもて光とし、光をもて暗きとし、苦きをもて甘とし、甘きをもて苦しとする者なり。禍いなるかな。彼らは己をみて智とし、自ら省みて聡^{さとし}とする者なり。禍いなるかな。彼らは葡萄酒をのむにますらおなり。濃き酒をあわするに勇者なり。彼らは賄賂によりて悪しき者を義とし、義人よりその義を奪う」(イザヤ5の20-23)。

義人よりその義を奪う。この通りだ。社会党に良心が、成田委員長に、佐々木更三氏に義がある。しかるにこれらの人々の義が国民から認められていないのだ。イザヤの預言のごとく、これらの義人の義は、不義なる佐藤栄作や、岸信介などという不法不義の政治家によって、奪われてしまっておる。我らの愛子長男和夫が一銭五厘として、天皇の軍隊に引っぱり出されて戦死したという事実は、我らの胸の中に義憤の火を燃やしてつきない。あきらめなどは一度もした事がない。あきらめをしたら、もう祈りができなくなってしまう。聖霊が我に宿り給う以上義憤の祈りは続いてゆく。老齢ますます元氣である。近頃余を励ますものは旧約聖書のダニエルの預言である。この預言書をよむ時に義憤の火は盛んに燃える。青年そのものだ。「先生、元氣ですね」と皆が言う。賛美歌を歌う声は周囲に響く。そうして時どき、「ばか者めがー」という声が出てくる。これは悪魔への大喝一声である。この時の一挙手一投足は神からである。神からきたものである。この力から離れた時は、デリラに欺かれたサムソンのごとく腰の力は奪われてヒヨロヒヨロになる。八十の老翁は石につまずいて路上に倒れんとする。悪魔は村田大造の

存在を呪っているのだ。しかし妥協せざれば必ず力はきたって、腰がピンとしてくる。靈力が腰に宿るのだ。元氣一杯で散歩する。この一步、一步、一步が悪魔の頭上を踏む一步とならしめ給えと祈る。そのとき余と天の聖徒とは相通じろのだ。したがって愉快的靈夢をみる。もうおれの魂は天国に入った。肉体だけが地上にいる」と叫んだ矢内原博士とも通じるであろう。神癒の信仰においては矢内原博士とは相違していたけれども、佐藤栄作や、岸信介のような政治家に対する義憤においては常に一致していたのだ。黙示録に書かれておる再臨を確信しているからだ。偽預言者の中田重治の『聖書より見たる日本』をよんだ時、佐藤姉は倒れてしまったが、矢内原博士の『黙示録』をよんだ時にすぐ力がきて起き上がった。そうして今度は直接ダニエルの預言書をよむ事になった。やはり信仰は前進しておる。ダニエル書は実に清涼剤だ。こんな幸福は世の中にない。ダニエル書を確信をもって読む時の喜びは全く再臨の喜びだ。

今日は朝おきて感謝し、また義憤することができた。この嘆息は、これ義憤なり。失望者の嘆息とは違う。義憤となって天空を翔る。

親を裏切った偽牧者と愚弟（立証小説その三）

突如として偽牧者がとび出してきた。ホーリネスの偽牧者が村田憩筆に向かってとびついてきた。

ホーリネスの牧者「先生、人を審くことは罪ではありませんか？中田監督のような人は、アメリカに行つてみても少ないのです。私の所の監督を誹謗せずにおいて下さい」

村田「私は誹謗などしておりませんよ。私はニコライ会堂で礼拝していた青年時代、「義に飢えかわくものは幸福なり。その人は飽くことをえん」の賛美歌が歌われる時は、必ず胸に十字架をかいて天を見上げたものです。もう一つ私が好んだ聖言の「我がために人なんじらを罵り、また責め偽りて様ざまの悪しき事を言う時は、なんしら幸いなり。喜び喜べ、天にて汝らの報いは大なり」という賛美歌が歌われた時も、やはり胸に十字をきつて天を仰ぎみたものであります。いま私は正義感に満ち溢れておるのです。私の最も愛した妹が、生みの母が逆境のどん底におちている時に、平気でそれを見殺しにするような行動をとっているのですよ。それが牧師の妻なのです。私は中田重治氏と野畑を誹謗しておるのではありませんよ。悔い改めよと言つて罪を責めているのです。罪を責める資格があるものが罪を責めなかったならばどうなりますか？よろしいですか。妹のお悦の口からスラスラと恐ろしいことばが、それもむしろ誇りに語られたのですよ。母の面倒を兄弟の中で誰が見るかということで家庭裁判所にもちこまれたということです。そういう問題をお悦は平気で私に語るのですよ。驚きましたね。私はものが言えませんでした。野畑は何をしているのだと、腹の中が煮えくりかえりましたよ」

ホーリネスの牧者「そうですね？」

村田「未信者でもそんな薄情なことは致しませんね。そんなに母が苦しんでいたとは知らずにいて申し訳ありませんでしたと言つてとんでゆきますよ。母をそういう所におとしこんでいるのが野畑夫婦

だったのです。野畑夫婦だったのですよ。それ故、神の厳肅のみ手が動いたのです。家庭裁判所に訴えたので、そこから人が訪ねてきた。「今まであなた方のような身分の人からの訴えを受けた事がありません。それでどうしてそんな事になったか事情を知りたいと思ってお伺い致しました。ことに自宅は牧師さんである。神学校の寄宿舎にお住いの方ですね。それでお伺いしたのであります」と言つて訪ねてきたというのである。一羽の雀も神のみ許したくば地におちず、というこの聖言に立つて、一切を処理しておるのが、野畑悦の兄である村田憩筆である。村田憩筆は神の国とその義きたしきを求めて一步一步と前進しておるのである。それ故ごまかしという事は嫌いだ。村田憩筆の結婚がいかに取り扱われたかという事がそれを証明しておる。村田の結婚の時はもう皆がこれは実によい結婚だと言つて急ぐとする。所が本人の村田憩筆はのんきなものだ。神様のみ旨に任せておるのだ。実に悠々閑々たりである。野畑と中田重治氏とはそうではない。ああ実によい獲物を発見した。あの羊はまだ若々しい。食つたらおいしいだろう。悪は急げだと、偉い勢いで中田重治氏は名古屋の我が家に飛びこんできたのだ。万事監督としての私におまかせ下さいというのである。よろしいか。善は急げではない。悪は急げだ。泥棒するのに悠々閑々としておれるか。やれやれである。百万救霊運動を叫ぶこの大馬鹿者の頭の中には打算以外の何ものもないのだ。両親は遂に欺かれてお悦をつれて名古屋から上京したのだ。二匹の狼は待ちかまえておった。そうしてこの小羊は食つたらおいしいだろうとお悦を捕虜にしまったのだ。確信確信。偽きよめを説く者の確信は悪魔からきておる。神に従え、悪魔に立ち向え。さらば彼なんじを逃げ去らん。村田憩筆は悪魔に立ち向かつているが故に、これだけの証言を書く事ができるのだ。これをよんで感

激して胸を打つならとにかく、「私の所の監督中田重治先生と野畑先生のことを誹謗するな」、というのである。こうした抗議は責任感の強い村田憩筆をして更に義憤せしめた。リバイバルはまだ早いよ。日本では早いよ。ムーデーだけに許された事を、自分もまた許されておると早合点してしまっておる中田重治は悪魔に魅いられているのだ。それ故、「内村君は馬鹿だ」の、「トルストイのような人が出たからロシアは滅びたのだ」などと、大胆な権謀術数の言を吐き出して村田憩筆を欺かんとしたのだ。お悦と同様に兄の私をも捕虜として、ホーリネスの福音使となさんとしたのだ。馬鹿な奴もあつたものだなあ。一見ただで村田憩筆を看破する事ができなかったのか。心の清き者は幸いなるかな。その人は神を見んとあるが、中田重治と野畑新兵衛は神を見ていないのだ。これぐらい霊眼の死んだ牧師は世に稀である。正教会のセルギー主教は日本に転任されてきた時すぐ目についた青年は村田憩筆であつたのだ。そうして会いにくるようにと影田秘書を通して申してこられた。神の摂理は嚴肅なものだよ。村田憩筆は小聖堂でセルギー主教とモット博士と三人で礼拝した事がある。プロテスタントのモット博士だ。しかるにその人の礼拝における態度の敬虔なことに村田は驚いたのだ。一見して驚くだけの眼力がなかったならば、そういうことは起こらなかつたはずだ。博士に向かって、「先生の中国における迫害の記事をよんだ時私はお祈りを致しました」と言う、と、モット博士は「ありがとうございます」と言った。そして「あなたはここ教会の信者ですか」と言った。「そうです」と私は答えた。すると「結構です結構です」と言つて、セルギー主教の室に入つてゆかれた。モット博士のような敬虔な態度で聖餐式を司会している神父は稀だ。モット博士が化体説の信仰者であるかどうかは知らないが、しかしプロテスタントのこの牧者が、パン

と葡萄酒に祝福を下したならば、葡萄酒は血となり、パンは肉体と化するであろうと余は思った。実に博士は敬虔な態度で礼拝をしておられたのだ。余と富永徳磨氏とは僅か十数分の語らいで結びつけられたのである。憩筆はちよつと語つただけであるが、すぐ「君は実に深い所を握つておられる」と富永氏は言われた。そうして、『再臨論を排す』、というあの小著は、村田憩筆に富永氏は相談した上で書かれた。動機は、無教会主義者の青年、実に明るい青年であつたその青年が、内村鑑三氏が中田重治と再臨運動を共にしたために非常に暗い気分になつてしまい、その事を富永氏に訴え、質問してきたのだ。それで富永氏が『キリスト再臨論を排す』という小冊子的なものを書いたのだ。そうしてまもなく富永氏は天国長屋に住んでいた余を訪問されたのである。一見した直感が正確になつた時、その人は靈眼の所有者になつたという事ができる。余は野畑が神田教会から洋傘を持つて出てきた時、過去は不良少年だつたらうなあと直感した。ムーデーならいざしらず、中田重治氏の「きよめ」できよめられるような日本人は少ないよ。日本は神道迷信の国だ。神道のために腹の底まで腐つてゐるよ。人々はなんのために伊勢神宮に行くのか？、古市の遊廓と伊勢音頭のためではないか？汚れと神聖とを取り違えているのである。余はそれ故つねにホーリネスの牧者に対して、パリサイの義にまさらずば天国に入ることを得ずと言つてきたのだ。野畑と中田らはパリサイの義におとる、否パリサイの義すらないのだ。この世で真実を失つてゐる人間ほど厄介なものはないのだ。パウロはキリストを迫害した。しかし迫害しておる時に、もはや奥に真実が潜んでいた。それ故「サウロ、サウロ、何ぞ我を迫害するか」（使徒行伝9の4）という声をきいたとき、直ちにキリスト教に転向する事ができたのだ。ガマリエルの門下生として律法で訓練